

東京学芸大学名誉教授 千々和 實  
群馬県史編纂委員 萩原 進

共編

# 高山彦九郎日記

〔日記編〕

## 第三卷

西北出版刊行

井上仲明

佐藤規矩

一斎の通

名は坦、

字は道一

名信行通

称幾久藏

後に捨藏

安永元、

十二、江

戸岩村藩

邸、幼生

る、才よ

以て聞え

後に林家

の塾長と

第一幕の

大学者と

この時名

十一歳に

東蒙一黒

沢東蒙

とぞ、佐藤規矩藏信行と共に出で、赤坂越前屋に入りて宿す、本庄駅作兵衛吉原いさしと遊ひて

狂歌

作 兵 衛

きぬくはいさほし高く置霜の

と述へければいさほし下を付けたりける、

朝日にとけてやとぬかりける

とぞ、作兵衛は中山ノ道なりと狂名す、

寄金棒恋

よるくは引るゝゑんや忍ひやい人目をかねの御用心棒

また

瀬戸物やの小娘に寄る初恋

よき手しをちよくと出して仕懸ケてもこいといさら今戸しらじな

となん中なりよめりしよし、夜雨降る、

二日、朝雨降る、赤坂を出で霞が関頼千秋所へ入る金を借らん事を欲す成らず、奥州より東蒙来りて

服部に滞留(マ)させるよし、尙綱が病を問ふて上州屋勘右衛門所へ入り御酒代百銅を置いて伊賀鎮靈神へ

今日は冬至に御酒を奉る事を託(託)す、御酒戴きて出で小松原剛治所へ寄る、夜に及んで奥平中邸に入れ

は申ノ刻に築次正妻死せるよし門番が語に初めて知る、土産にとて求メたりし甘露梅を枕の辺りに

置ひて礼しける、次正愁歎して語るを聞ク落涙に堪へずそ有りける、夫及び姑其外子共等迄永訣をな

(ほ脱カ)

川田千之助  
左衛門  
の孫か、  
即ち築川  
の妻が川  
田金左衛  
門の子の  
妻たりし  
時の子か

して終りしとぞ、暫クにして伊勢崎より川田千之助来着、見るに堪へず哀れなる事共也、終夜次正を慰して寝ねすして夜明けたり、

三日、曇る、朝羽生氏へ行く婦へりて前野に寝ぬ、松原右仲来りしに目覚めたり、築氏に至るに墓誌の談事有りて岐山清書す、銅板に彫る事を羽生に詫し尾張町布袋屋が裏にて飾屋太右衛門に申付ける、夜中弥淵を具して築氏へ婦へりける、終夜築氏に居りて助け侍る、

四日、晴る、羽生氏へ行く、弥淵昨日より羽生を助けて居りける、夜に入て墓誌の銅板成る、爰に載す、

妻縁播州姫路臣荒川氏女。初叔父川田氏上州伊勢崎。臣娶為其子某室生二子後。有事故為叔父川田氏女嫁。于予為後妻生三子寛政元年己酉十一月二日病死于武州豊嶋郡鍊砲津邸年三十三越同月五日葬於荏原郡三田龍源寺先墓之側有兄弟姉妹在於姫路。

豊前中津臣築次正誌後人若看此誌憫察此意

とぞ、本文十行に彫刻せり、今夜沐浴入棺也、築氏克ク慎終の事をなして衣衾をも製したり衣裳は白むく也、終焉よりこのかた物を備へ香を焼く事を子共に命じ替るく勤めしめ愁歎多し、見るに涙を流さざるものなし、屋敷によりて沐浴もなして寺院に於て事を行ふものになり行きぬれど奥平家は昔より家士皆ナ其居所に於て行ふを以テ例とすると聞けば、君侯代々厚き事にそ覚ゆ、輕薄の君出るに至らは世間にならふて寺院に詫するに及びなんしからば塵芥をはき棄るか如くなり行き(諄ノ誤カ)執厚の風は失せん、他家と並べ見るに家士の風俗質朴にして厚クそ覚ゆ称誉すべし、今夜も築氏の

為メに棺の辺りに居て夜をあかしける、

五日、丁亥、冬至十一月中巳ノ初刻に入る、築氏室人葬礼日中と定めける所理藏主来る事遅ッし予対す素より相識れりと云ひける、未ノ刻出棺也、次正の嫡次行及び川田千之助（マ、カ）にて従ふ、茂雅助く皆ナ麻上下也、棺の次に薙刀を具す、其後家内の積有りて予出ツ、芝新橋を渡りて増上寺片門前を過ぎ薩侯の表門を左に見、有間侯の邸の後の坂を経て綱坂を下り会津侯の下邸を廻りて三田龍源寺に入る、早や申ノ刻過る頃也、墓地へ至り見るに壙を開きたる男二三人休ミ居る、羽生朝辰香取弥淵長崎南長石灰杯用意して待ち居りける、壙の狭き所を広めしめける事あり、七ツ七分斗に法事畢て壙に下す、茂雅は次行千之助を助けて去る、朝辰弥淵南長は止まりて修む、棺と櫛との間に土を入れ棺の蓋の上の合セ目（カ）石灰にて塗り堅めたり、朝辰弥淵南長克ク働きぬ感心に堪たずそありける、僕作助甚助は竹の囲成りて後に去りぬ、暮に及ンで龍源寺隠居に至りて羽生が墓前に勤る事今夜一夜毎夜燈明の限り火を守りて墓前に侍る事を告げ当住寺へも達し玉入れと乞ふ、隠居諾して後に朝辰を具して又至る、酒をしひて飲ましめんとするを今日は決して酒を断つ事を断りて出で住寺へ墓前に朝辰侍する事を告ぐるに納所の僧出で、いへるは、住寺不快にて出る事能ハズ愚僧を以テ申す其義相叶ハざる義也若シ左様の義ならば築氏（カ）先達而書状にて申越さるべき等閑の致し方也といふ予答へて、隠居には素より知れる事也書状よりも慥に生る証拠朝辰を引合せて乞ふ事也若シ胡乱に思ハズ築へ使を越して尋ねられよ我々は墓前に居りて其左右を待ツべしと墓に至るに弥淵南長侍し隠居の僧来て読経す、経畢て云へるは、源十郎殿一人にて淋しからめと存ンじ参りぬ当住不得

(も脱カ)  
心にて大事なし燈明をも上げ玉へといへる故始めて燈火を上げゝる、斯て弥淵南長をはしひて帰へらしめける、暫ク有りてまた隠居又々酒をしひけるに決して飲まずとて帰へらしめけるに火を持ち(マ、)来り或は琉球芋を焼ひて予と朝辰に進めける、住寺よりも僧と僕とを以テ疊ミ抔持たしめて来たしけれと疊ミの上には居らぬもの也とて帰へしける、夜半に及んで納所陳蔵主墓前に来り只今築氏へ参りて帰へりぬ通夜し玉へ御苦勞也と勞して去る、住持か不心得にて予も墓前に朝辰を終夜助けたり、今日曇る夜は晴れたり不思議にも寒からずぞ有ける、

六日、明るを待ちて寺門を出ツ、住寺と隠居へは朝辰に言を残して去る、増上寺片門前に至りし時に南長に逢ふ、朝辰か為メに食を送れり奇特の事也、筑地に及んで入湯して奥平中邸に入る、築氏に昨夜の事を告げ前野に帰へりて寝んとするに台村茂八来る、長叔より書有り昨夜京橋南銀座町三丁目大坂屋八右衛門伴当嘉兵衛所に着のよし茂八国の有様を語る、暫ク子共等の雨宿りを長叔に願ふて江戸に逃げ来るより外はなし予が物を家兄投げ放らるとある恐れ入たる事也、

尊物の有るは家兄も知たる事也、田中の元益に預る共長叔また如何にも致さるゝ共あれかし龜末致されす太事になし預らるゝやうに申すべしといひける、茂八去りて後に睡りける、前野氏酒を出たす、七日、朝出で、京橋南銀座町三丁目嘉兵衛所へ至りて茂八に逢ふて長叔への返書を書き、久ふして立ツ、茂八明朝帰村のよし、京橋を渡りて引廻しの過るを見る、先きに紙旗に罪過の事を書し次のひく横板に書し皆ナざん切り共指上げて行く、其後トに罪人繩付にて馬上し薄青色の着物にして引かるゝ、其ト跡につく棒さすまたを持ツ其後トは与力二騎附く中曾根村牛松二十一歳火あぶりに行ハる

谷伴兄  
一江戸日  
記一及び  
一京都日  
記一参照

の書付也、本町に及んで香を調ひて富士山の雪白々と積りたるを見る、神田に至りて靈神を拜し奉る酒を出だせり、勘右衛門銀を買ふて帰へる、連雀町森重蔵に逢ふて南鐐一片を借る、赤坂田町老丁目越前屋与兵衛所に入る、糺町五丁目上州屋惣兵衛と酌ミ居りける予にも進めたり、久七を雇ふて僕とし麻上下になりて三田龍源寺に至り寺に入て理蔵主を案内とし位牌へ向ひ香燵として南鐐一片を住持へ納め甘露梅を隠居へ寄す、墓に至りて沈香を焼ひて拝礼す、朝辰も墓前に侍す、築家正田家の墓を礼す、急き出で、土佐侯の邸に及びて谷伴兄を尋ぬる、門番が云へるに先月十八日に到着致す通らせ玉へ貴書に及ばすと存ンジの外に安ク入る事の叶ひけるま、中長屋に至りて谷伴兄に逢ふ、大によるこびける、酒を出だし大津小三郎酌に立ちぬ、語て暮に及ぶ君侯大切の時に伴兄道中二百余里の所を国迄十日半に過ぎず着きぬと語る、

今上の供御に備りたる物を寄す、拝し奉りて受ク、夜に築氏へ入り焼香し前野に寄りて赤坂旅館に帰へる、宿して吐す事有り、

八日、越前屋を急き出で、上総屋酒店にて飲ミて麴町貝坂角三崎屋清吉なるが所に於て梅洞詩集五冊を十文目に付けて神田鍛冶丁二丁目に及びて勘右衛門所へ寄る、茂八に逢ふて鳥井所に於て紅粉揚元結を調ひてりよ女が帯ときの故に与へ侍る、義介方へ居られざるに至らは来るべしと申シ越す、長叔にも又々同ナジ、さき事も四年の間勤めあしからず不義にもあらずは来るべし、附人なくては無用のよし申越し侍りし也、谷伴兄寄せたりける

尊物をも送りぬ、遂に奥平中邸に入り、築へ見舞ふて前野に宿す、今日築氏の室人一七日とす、羽生氏

りよ女  
高山の末  
女子りよ

さき一後  
妾さき

何事も切々  
歌の情  
親愛の情  
を述べて  
ある歌の  
一で當時  
家庭的に  
懊悩を  
苦衷を示

今日迄暮前に詰めたり奇特の事也、今日義介へ与へし文の中に歌よみて越しける、爰に載せ侍る、  
何事も思ひの外と思ひ知れとても居られぬ身にしならすや(マ、)

九日、中飯後前野老人に南簾一片を借りて出で羽生氏を問ふに居らず、弥淵を問ふに是も居らず、遂に連雀町森重蔵に逢ふ、一昨日借る所の南簾を返へし侍りて帰へるとて甚右衛門を問ふて青物町新道小松原剛治を尋ぬ、座に浅草誓願寺門前名主原田半三郎居りける、酒出で、暮に及んで立ツ、日本橋を過る時に横板の罪書を見るに葛飾郡二合半領中曾根村無宿牛松二十一歳中曾根村百姓家へ火附して無宿要助けん長と馴合と盗せんとし、其後昨年足立郡赤井村の寺へ火を附ケ留主居泰麟を焼殺し其ノまきれに六十両余盗ミ取り、また今年足立郡鹿浜村寺へ火附致す、以上三度迄火附けせし尤かによりて浅草に於て火あぶりに申付けらるゝのよし記るせり、当七日引廻しになりし牛松也、奥平中邸前野氏に帰へりて宿す、

十日、曇る、達と共に出で、竹川町に別る、南長を問ふ朝辰居りて酒を買ふて出だす、時に南長其ノ娘が煩へるによりて築々下げて帰へる、又々彼レ酒を沽ふて出だす、江戸に留り玉ふてト居しかるべしと進む、ト筮し候へとて銀を包みて出たし侍る、南長ト筮しけるは、火雷噬嗑を本卦とし天雷无妄を變卦とす、断して曰ク、ト居急ぐをよしとす、朝辰もまた同ナし、予答へていへるは、如何にも任せぬ何レ共し玉ハれといひける、又々筮を取て火地晋の卦を得る、弥々急ぐが宜しといひし、別れて林家へ入りけるに中嶋も根本も他出書を残して麴町貝坂角三崎屋に梅洞集ある事を常足に知らす、岡村勝虜所に入る、勝虜熊沢先生行状一冊を寄す、暫ク語りて奥平中邸に帰へる、築氏に見